小学校国語科における
説明的な文章を正しく読み取る力の育成

――　「比べるアイテム」を活用した表現の工夫の読み取りを通して　――

長期研修員　　園部　英子

《研究の概要》

本研究は、小学校国語科において、「説明的な文章を正しく読み取る力」を育てることを目指したものである。説明的な文章を読み取る「精査・解釈」の過程において、筆者の「表現の工夫」を読み取るために、比較検討資料「比べるアイテム」を提示する。

さらに、「比べるアイテム」を活用して捉えた「表現の工夫」の必要性を考える活動を設定することにより、筆者が表現を工夫した意図に気付くことができ「説明的な文章を正しく読み取る力」の向上に有効であることを、授業実践を通して明らかにした。

キーワード　【国語－小　読むこと　説明的な文章　精査・解釈　表現の工夫】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｇ０１－０２　平成２９年度　２６３集

Ⅰ　主題設定の理由

子どもたちを取り巻く環境は、情報化や技術革新により、急速に変化している。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含めて社会のあらゆる領域に及んでいる中で、教育の在り方も新たな事態に直面していることは明らかである。

文部科学省教育課程企画特別部会より出された論点整理（平成27年８月26日）には、「急速に情報化が進展する社会の中で，情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力，物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」），統計的な分析に基づき判断する力，思考するために必要な知識やスキルなどを，各学校段階を通じて体系的に育んでいくことの重要性は高まっている」と示されており、国語科においては、文章を読み取る場面で、多角的・多面的に吟味する力を身に付けることが求められている。

小学校学習指導要領（平成20年３月公示）国語科における「読むこと」の学習では、授業時間の削減や全国学力・学習状況調査の実施等を受け、初見の文章を短時間で読み取る必要性が高まり、文章全体を見て構造を捉える読み方が研究されてきた。平成28年11月に群馬県教育委員会より発行された全国学力・学習状況調査に関する資料では、課題解決に向けた様々な取組の成果として「本や文章を読む問題の正答率が高い」と分析されている。一方、「目的や意図に応じて、グラフを基に、自分の考えを書く」「目的や意図に応じて、表を基に、自分の考えを書く」問題については課題が見られた。表やグラフなど、読み取るべき資料を基に自分の考えをまとめることが課題であることから、主に説明的な文章において使われている論理的な文章表現の技法が十分に身に付いていない様子が推測できる。文章の読み取りを行う段階で、内容自体の読み取りにとどまり、論理的な文章のつながりや表現の工夫を読み取るまでには至っていないのであれば、説明的な文章を読み取る過程において、表現の工夫を捉え、筆者の意図を読み取る力を身に付けるための授業改善が必要である。

国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年５月31日）では、「読むこと」の領域における資質・能力を育む学習過程として「『学習目的の理解（見通し）』,『選書（本以外も含む）』,『構造と内容の把握』,『精査・解釈』,『考えの形成』,『他者の読むことへの評価，他者からの評価』,『自分の学習に対する考察（振り返り）』,『次の学習活動への活用』」を示している。特に「精査・解釈」の過程においては、以前より、汎用的な「読み」の力を身に付けるための方法が模索されており、説明的な文章において「どのように書かれているか」という表現の工夫を読み取るための、具体的な手立てが必要であると言える。

そこで、本研究では、説明的な文章の解釈における「精査・解釈」の過程において「表現の工夫」を読み取るために「比べるアイテム」を提示する。言葉や文、段落間のつながりや相互の関係などを比べた際に、児童は筆者の意図した表現の工夫に気付くことができ、その必要性を考えることを通して説明的な文章を正しく読み取ることができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校国語科の説明的な文章を読む学習において、「比べるアイテム」を活用して「筆者の表現の工夫」を読み取り、その必要性を考えることが「説明的な文章を正しく読み取る力」を身に付けるために有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説（研究の見通し）

１　「表現の工夫」を捉える

「比べるアイテム」を活用して文章を比べることで、文章構造や論理関係を捉え直すことができ、表現の工夫を読み取ることができるであろう。

２　「表現の工夫」の必要性を考える

捉えた表現の工夫の必要性を考える活動を行うことで、筆者の意図を捉えることができ、説明的な文章を正しく読み取る力を育成することができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　「説明的な文章を正しく読み取る力」とは

説明的な文章とは、筆者がある事柄について読者に分かりやすく説明するために書いた文章である。小学校学習指導要領では、「説明的な文章の解釈」における第５学年及び第６学年の目標として「目的に応じて，文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり，事実と感想，意見などとの関係を押さえ，自分の考えを明確にしながら読んだりすること」と示されている。

「内容を的確に押さえ」とは、「何が書かれているか」を押さえるということであり、読者が興味を引くよう筆者が意図的に用いた事例などを表現に即して読み取ることである。「要旨」とは筆者が最も読者に伝えたい主張を簡潔にまとめたものである。つまり、「何が書かれているか」という内容とともに、筆者が事例を通して読者に伝えたい「主張」を読み取る必要性を示している。

小学校段階で「説明的な文章」から読み取ることのできる情報は、内容（何が書かれているか）と表現の工夫（どう書かれているか）である。筆者は、内容も表現の工夫も意図的に選択して文章をつづっている。つまり、内容と表現の工夫の両方に筆者の意図が内在している。このことから、両方を読み取って初めて、正しく筆者の意図に気付くことができると考える。

では、筆者は何のために意図的に内容を選び、表現の工夫を駆使しているかと言えば、自らの主張を相手に受け入れてもらうためである。内容とともに、表現の工夫から筆者の意図を読み取ることが、筆者の主張を正しく捉えることとなり、説明的な文章を正しく読み取ることにつながると考えられる。

以上のことから、構造や内容の大体を捉え、さらに、表現の工夫を捉える過程を経て、筆者の伝えたいことを正確に読み取ることができる力を「説明的な文章を正しく読み取る力」と捉える。

また、小学校段階における「説明的な文章を読む」姿として表記されている高学年の目標は、低学年・中学年における「時間的な順序の把握」や「段落相互の関係の捉え」の学習の上に成り立つ力である。低学年・中学年での読みの力を、高学年での「読み」に生かすためには、表現の工夫に着目する「読み方」を系統的に指導することが必要であると考える。そこで、第２学年と第５学年において「比べるアイテム」を活用した実践を行い、その有用性を明らかにすることとした。

(2)　「比べるアイテム」とは

児童が説明的な文章を読む際、まず、様々な事例に興味を引かれる。文章を読み、比べるという経験が少ない児童にとって、筆者が意図的に構成し、論理的に話題を展開していく「表現の工夫」を捉えることは難しい課題であると言える。

そこで、表現の工夫を読み取るための視点を明らかにする資料として「比べるアイテム」を提示する。新たな学習内容から価値を見いだすためには比較するための対象が必要であると考えるからである。そうすることで、子どもたちは教科書とアイテムを比べながら読み、自らの力で筆者の表現の工夫を読み取ることができるであろうと考えた（図１）。

例えば、本文に似た表現の工夫で書かれているテキストを「比べるアイテム」として提示すると、表現の共通点を見付けることで、表現の工夫を捉えやすくなる。つまり、「比べるアイテム」を提示することにより、表現の工夫を見付けるための視点が明確となり、筆者が意図的に配した表現の工夫に児童が自らの力で

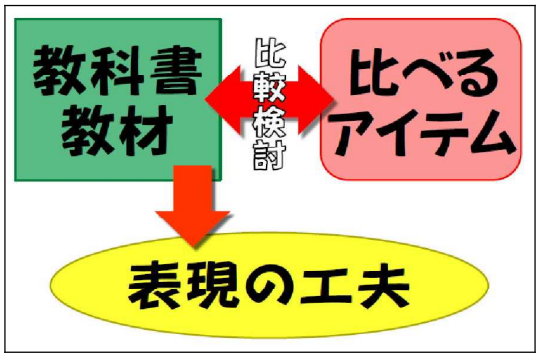


図１　比べるアイテムを活用した表現の工夫の読み取り

気付くことができるようになると考える。

このように、表現の工夫を読み取るための視点を明らかにする資料を「比べるアイテム」と捉える。

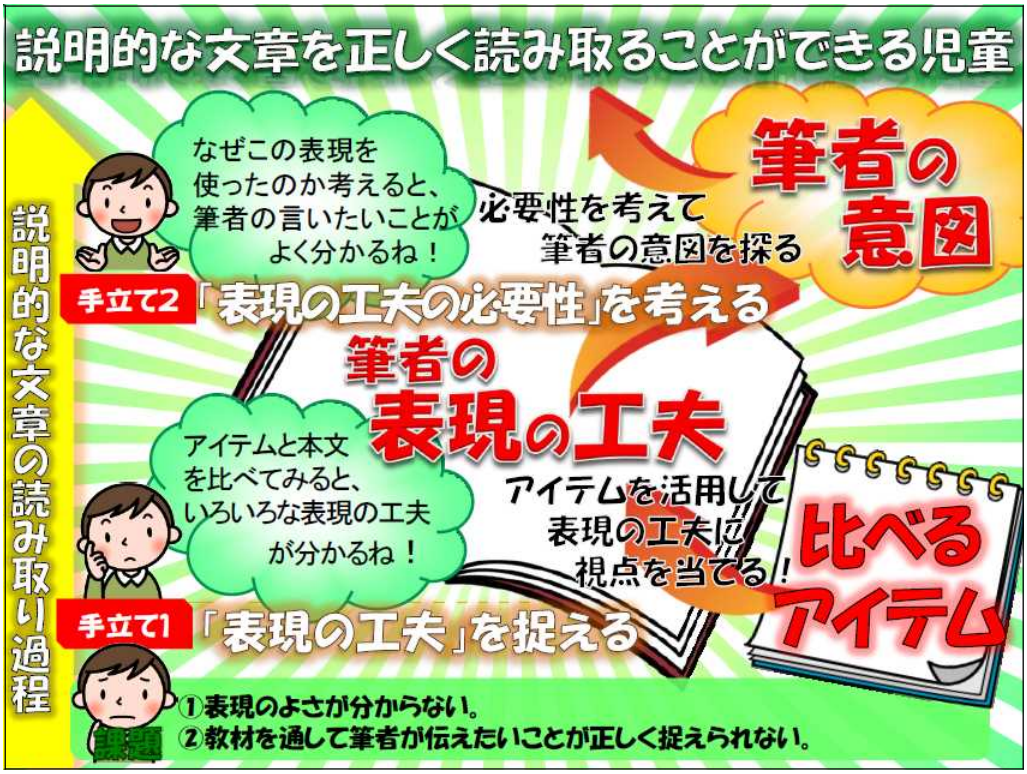
(3)　「表現の工夫」の必要性を考えるとは

「表現の工夫」には、筆者が読者を説得するための意図が内在している。そのため、文章を読み、見付けた「表現の工夫」がどのような筆者の意図で構成されたかを考えることは、表現の工夫と筆者の主張とを関連付けることとなり、筆者の意図を明確に把握するための一つの手掛かりとすることができると考える。

「表現の工夫」の必要性を考える活動を行う際には、低学年では、「見付けた工夫があると、どんなことに役立つだろう」「どんなときに使えるだろう」と問い掛け、自らの経験と照らし合わせる活動を通して筆者の意図に迫らせる。併せて、読み取った表現の工夫を使って文章を書くことで、「筆者が伝えたかったこと」を「自分が伝えたいこと」に置き換えながら学んでいくことができると考える。また、高学年では「なぜこの表現の工夫が必要だったのだろうか」とその必要性を考える活動を行うことで筆者の主張に迫らせる。

このように、表現の工夫と筆者の主張とを関連付け、筆者の意図を捉えることを「表現の工夫」の必要性を考えることと捉える。

2　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

1　授業実践の概要

対象	所属校　第２学年　25名	所属校　第５学年　30名
期間	平成29年10月19日～10月31日（全６時間）	平成29年10月19日～10月31日（全７時間）
単元名	１年生におもちゃの作り方を「分かりやすく」説明しよう ～副教材と本文を比べて読み、筆者の表現の工夫を読み取る～ 「しかけカードの作り方」	説得力のある文章の書き方を知ろう ～事例のある文とない文を比べて読み、筆者の表現の工夫を読み取る～ 「天気を予想する」

２　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法	
		低学年（第２学年）	高学年（第５学年）
見通し１	「比べるアイテム」を活用して文章を比べることで、文章構造や論理関係を捉え直すことができ、表現の工夫を読み取ることができたか。	・「比べるアイテム」を活用して見付けた表現の相違点、類似点の内容 【ワークシートの分析・考えを共有する場面での発言の分析】	
見通し２	捉えた「表現の工夫」の必要性を考える活動を行うことで、筆者の意図を捉えることができ、説明的な文章を正しく読み取る力を育成することができたか。	・筆者の文章構成に従って書いた作文の内容　【作文の分析】 ・筆者の表現の工夫についての気付き　【発言の分析】 ・本単元で学習したことのまとめ　【振り返りシートの分析】	・捉えた表現の工夫が筆者の主張とどうつながっているかの捉え　【振り返りシートの分析】 ・要旨のまとめの内容　【作文の分析】 ・筆者の考えに対する自らの考えをまとめた意見文の内容と活用した事例　【作文の分析】

３　抽出児童

	低学年（第２学年）	高学年（第５学年）
A	内容の把握は得意で、繰り返しによる表現の工夫については捉えることができる。「比べるアイテム」を活用することにより、繰り返し以外の工夫についても意識を広げて読み、意図的な表現がなされていることに気付くことができるようにしたい。	内容の把握は十分できる。表現の工夫も捉えることはできるが、表現と筆者の主張との関わりを考えるまでに至っていない。「比べるアイテム」を活用することにより、筆者の表現の工夫に気付かせるとともに、その必要性を考える活動を行うことで筆者の主張との関わりを捉えられるようにしたい。
B	内容について考えることはできるが、文章の構造や表現の工夫に意識が向いていない。「比べるアイテム」を活用することにより、文章の特徴的な構造や表現の工夫に気付くことができるようにしたい。	説明的な文章の読解に抵抗感を感じ、段落相互の関係を捉えることなく、一部の読み取りのみで要旨をまとめようとすることがある。「比べるアイテム」を活用することにより、筆者の意図的な表現の工夫を捉えるとともに、その必要性を考える活動を行うことにより、文章全体のつながりや表現の工夫の必要性に気付くことができるようにしたい。

４　評価規準

		低学年（第２学年）	高学年（第５学年）
目　標		順序を考えて教材文を読み、説明の仕方について考えることができる。	筆者が伝えたいこと、論の進め方、図表などの活用について考えをまとめて発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
評価規準	国語への関心・意欲・態度	しかけカードの作り方に興味を持ち、どのように書かれているかを整理しようとしている。	題材、筆者の考え、説明の仕方に興味を持って読もうとしている。
	読む能力	手順や事柄の順序などに気付いて読んでいる。	筆者の説明の工夫やその効果が表れている部分に気付き、読み取っている。
	言語についての知識・理解	順序を表す言葉や表現の意味を理解している。	語と語の関係に気を付けることで、文の意味が捉えやすくなることに気付いている。

５　指導計画

【学習のめあて】　評価

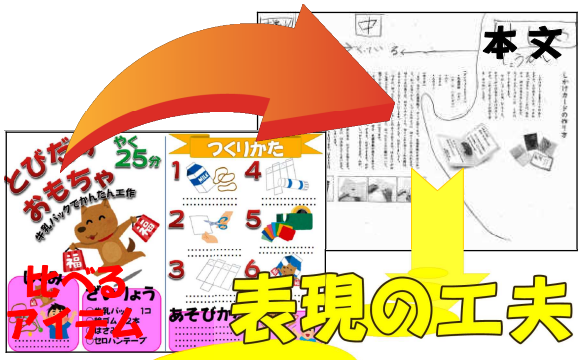
	低学年（第２学年）	高学年（第５学年）
	筆者の表現の工夫を使って書くために読もう	**筆者の主張を読み取り、要旨をまとめよう**
文章の特徴や内容を捉える	文章全体から内容や文章構成を捉え、文章の特徴に気付く	
	【学習課題を設定し、学習の見通しを持つ】 学習内容に興味を持ち、学習する意欲を持つことができた。【関・意・態】	【学習課題を設定し、学習の見通しを持つ】 学習内容に興味を持ち、学習する意欲を持つことができた。【関・意・態】
	【全文を「はじめ・中・おわり」に分け、内容の大体をつかむ】 説明書に書かれている大体の内容を読み取ることができた。【読む】	【全文を文章構造に分け、内容や段落相互の論理関係をつかむ】 本文を図表と関連付けながら読むことを通して、文章構造を読み取ることができた。【読む】

「表現の工夫」を捉える

文章構造や論理関係を他の視点から捉え直し、表現の工夫を捉える

【アイテムと本文を比べながら読み、表現の工夫を捉える】

「比べるアイテム」を活用して文章を比べる



①説明的な文章には順序を表す言葉が用いられている
②様々な表現を使って順序を表すことができる

ex.　副教材と比べる・典型的な段落と比べる・教師作成モデルと比べるなど‥

比べるアイテムと本文を比べながら読み、表現の工夫を捉えることができた。【読む】

【アイテムと本文を比べながら読み、表現の工夫を捉える】

①本文と「まとめの段落」の文章構成が相似している
②筆者の主張と直接関係のない意味段落が用いられている

ex.　題名と比べる・まとめと比べる・自分で考えた事例と比べるなど･･･

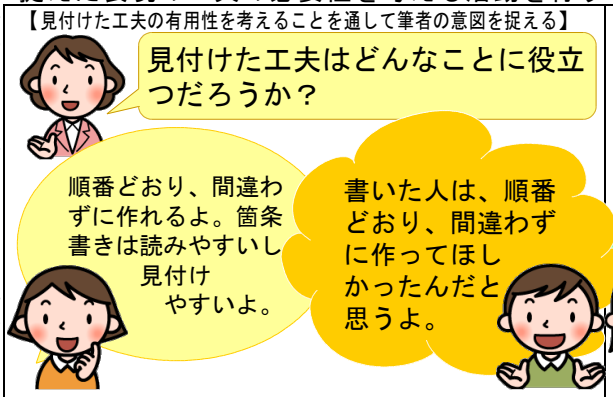
比べるアイテムと本文を比べながら読み、表現の工夫を捉えることができた。【読む】

検証：見通し①「比べるアイテム」を活用して文章を比べることで、文章構造や論理関係を捉え直すことができ、表現の工夫を読み取ることができたか。

筆者の主張を正しく読み取る

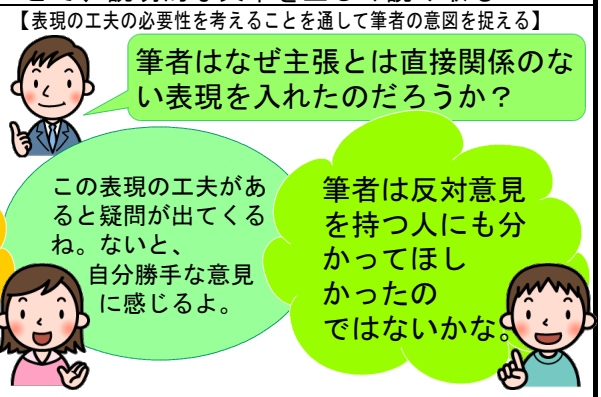
捉えた表現の工夫の必要性を考える活動を行うことで、説明的な文章を正しく読み取る

【見付けた工夫の有用性を考えることを通して筆者の意図を捉える】



表現の工夫の効果について考え、その必要性を捉えることができた。【読む】

【表現の工夫の必要性を考えることを通して筆者の意図を捉える】



筆者が表現の工夫を使った理由を考えることを通して筆者の主張を捉え、まとめることができた。【読む】

【捉えた文章構造に沿って、自分で文章を書く】
- 見付けた工夫を使って、自分の説明書を書く。
- 友達と説明書を読み合って、見付けた工夫を使えているかどうかを確かめる。

表現の工夫を使って説明書を作り、学習内容を振り返ることができた。【関・意・態】

【筆者の主張に対しての自分の考えをまとめる】
- 要旨をまとめる。
- 筆者の主張に対して自分の考えをまとめる。

筆者が伝えたいことについて自分の考えをまとめることができた。【読む】

検証：見通し②捉えた表現の工夫の必要性を考える活動を行うことで、筆者の意図を捉えることができ、説明的な文章を正しく読み取る力を育成することができたか。

Ⅵ　研究の結果と考察

「比べるアイテム」を活用して「筆者の表現の工夫」を読み取り、その必要性を考えることが、「説明的な文章を正しく読み取る力」を育成するために有効であることを、第２学年の「表現の工夫」を捉える活動、「表現の工夫」の必要性を考える活動の順で、見通しに沿って考察する。その後、第５学年の「表現の工夫」を捉える活動、「表現の工夫」の必要性を考える活動の順に考察する。

「筆者の表現の工夫」を読み取る前には、新出語句の意味理解や文章構造の読み取りなどを行い、文章構造の特徴や内容を捉えてきた。具体的には全文シートを活用し、全体を見て読み取ることで、文章構造の型や特徴を捉えた。また、題名から知っていることや感じたことなどを想起させたり、具体的に内容をイメージさせたりして、読みの見通しを持たせた。

１　単元名　「１年生におもちゃの作り方を『分かりやすく』説明しよう」
教材名　「しかけカードの作り方」　第２学年

(1)　「表現の工夫」を捉える

①　活用した「比べるアイテム」と学習活動の概要

第２学年の実践「１年生におもちゃの作り方を『分かりやすく』説明しよう」は、既習の「時間を表す言葉」という「具体的な言葉を使って順序を表す」段階から、接続語や指示語という「抽象的な言葉を使って順序を表す」段階へとつながる教材である。経験と結び付けながら、順序を表す言葉の効果に気付くことができるように、単元の初めにおもちゃ作りを行い、その作り方を１年生に教えるための説明書を作るという学習課題を設定した。

表現の工夫を捉える段階では、「説明的な文章には順序を表す言葉が用いられている」ということを読み取らせるために、図２のような観点で選定した副教材を「比べるアイテム」（以下アイテム）として活用した。「順序を表す言葉」は日常生活の様々な場面で活用されてはいるものの、教科書教材のように接続語で表されているものばかりではなく、数字が用いられていることが多い。そのため、アイテムにも数字で順序を表している文章を選び、様々な表記の仕方があることに気付けるようにした。副教材は、出版物をコピー（出版社許可済、使用後廃棄）して活用することで、見付けた工夫を共有したり探し方を教え合ったりできるようにした。まず、副教材から「分かりやすい説明の工夫」を見付け、見付けた工夫に赤鉛筆で印を付けた。その後、教科書に「アイテムと同じ工夫はないか」を考えることを通して、アイテムにも教科書にも「作り方」には「順序を表す言葉がある」ことを捉えた。

観点	教科書	副教材
	おもちゃの名前	おもちゃの名前
	紹介文	紹介文
	材料・道具	材料・道具
		時間
	作り方	作り方
	遊び方	遊び方
	写真	写真
		しくみ
	箇条書き	箇条書き
	順序を表す接続語	順序を表す数字

図２　副教材の選定の観点

②　全体の様子から

アイテムの読み取りを始めると、一斉に印を付け始めた。一方「分かりやすい工夫」がどれなのか分からず、図のみに印を付けている児童もいた。そのため、項立てや書きぶりに目が行くように、項立てに印を付けている児童を全体の前で紹介した。すると「ああ、そうか」とつぶやきながら、項立てや箇条書きの表記に印を付ける姿が見られるようになった。

T：アイテムと、教科書を比べてみよう。
T：「作り方」を見てください。同じ工夫がありますか？
C：教科書には順序を表す言葉があるね。
C：まず、つぎに、それから、さいごにがあるよ。
C：アイテムには順序を表す言葉はないよ。
T：アイテムの「作り方」には順序を表す言葉がないのかな？
C：番号が書いてあるよ。
T：順序を番号で書いてもいいんだね。
T：作り方にはなぜ「順序」が必要なんだろう？
C：順番どおりに作らないときちんと作れないから。

図３　「比べるアイテム」活用の様子

教科書とアイテムを比べた際には、図３のようなやり取りが見られた。特に下線部を施したやり取りからは、アイテムと教科書の表記の違いに気付いている様子がうかがえた。さらに、波線を施したやり取りのように「順序を表す言葉」が必要な理由まで捉えられた様子がうかがわれ、表現の工夫と筆者の意図を関連付けて捉えようと、児童の思考が進んでいることが分かった。

③　抽出児童の様子

抽出児Ａは、アイテムの中の順序を表す数字に目を向け、印を付けた(図４)。その後、本文から同じ表現の工夫を探した際には、順序を表す接続語に印を付けるのではなく、その上に数字で番号を振っていた。抽出児Ａは、アイテムと本文を比べ、順序を表すためには様々な表記の仕方があることにも気付くことができたと考える。抽出児Ｂは、アイテムの細部まで目を配り、写真があることや「遊び方」があることなど様々な「つくり」を見付け、印を付けた(図５)。そのため、本文の項立てや写真の工夫にも気付くことができたと考えられる。「順序を表す言葉」については表記の違いにより自分で見付けることはできなかったものの、全体での共有を経て他の書籍を読み進めるうちに、隣の児童に「ここだよね？」と話しかける様子が見られるようになった。抽出児Ｂは、友達の意見を聞いて理解した「順序を表す言葉」を、他の書籍を読みながら「確かにある」と実感することで、自ら「順序を表す言葉」を見付けることができるようになったと考えられる。

図４　アイテム（イメージ図）と抽出児Ａの全文シート（部分）

このことから、副教材を「比べるアイテム」として活用するには、教科書と同じ文章構成を持つ書籍が効果的であることが分かる。また、今回は「順序を表す言葉」が番号で提示してあったことも、表記は様々でも「作り方」には「順序を表す言葉」が不可欠であることを理解するために有効であったと思われる。児童の気付きを促す副教材の選定は今後も検討する必要があると考える。

(2)　「表現の工夫」の必要性を考える

①　学習活動の概要

「表現の工夫」の有用性を考えるために、「見付けた工夫はどんなことに役立つだろう」と考える時間を設けた。「順序を表す言葉」を見付けた際にも「順序が分からないとうまく作れないから」と発言する児童もおり、その有用性を捉えることによって表現のよさに気付くことができると考えた。そして、見出しや箇条書きの工夫、順序を

図５　アイテム（イメージ図）と抽出児Ｂの全文シート（部分）

表す言葉を入れると正しくおもちゃを作ることができることなどを全体で共有し、１年生に向けて「おもちゃ作りの説明書」を作成した。

②　全体の様子から

「おもちゃの紹介があると、１年生が作りたくなる。」「紹介がないと、どんなおもちゃか分からないから、誰も作ってくれない。」と、教科書から見付けた工夫の一つ一つについて役に立つ場面を検討していった。しかし、「箇条書き」の有用性については捉えにくそうであった。そこで、教師が「材料と道具」を話し言葉で書いた文章を提示すると、「箇条書きの方がすぐに分かるよ。」「全部そろったか数えるときに使えるよ。」とその有用性に気付く発言も見られるようになった。

表現の工夫を捉えた後には、自分で作ったおもちゃの説明書を書いた。書く際には、教科書を確かめながら表現の工夫を使って書くことができた（図６）。表現の工夫の有用性を捉えたことで、表現を活用することの価値を実感できたことが、進んで使おうとする意欲を高めたからであると考える。

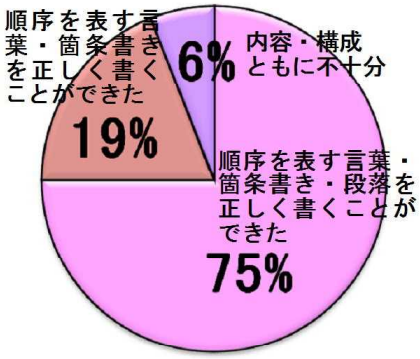


図６　表現の工夫を使って説明書を書いた児童の割合

③　抽出児童の様子

抽出児Ａは「順序」の必要性について「途中からでも作り方が分かる。」と発言した。理由を尋ねると、「みんなでしかけカードを作ったときに、遅い友達に作り方を教えてあげられたから。」と話していた。自分と進度の違う友達に、順序を表す言葉を手掛かりにして次の作業を教えたことと関連付けて考え、表現の工夫を捉えることができたと考える。

説明書を作った際には文章の初めに遊び方を書く工夫を取り入れていた。副教材以外に準備した他のおもちゃ作りの書籍を読んだ際に、キャッチフレーズに興味を持っていたことから、１年生が興味を持つように、自分なりに工夫を取り入れて言葉を選ぶことができたと考えられる（図７）。自分で作ったおもちゃの説明書ができ上がると、「他の説明書も書いてみたい」と言い、他の書籍を次々に読んでいた。抽出児Ａは、表現の工夫を捉え、その必要性を考えることを通して、表現の工夫を使って自分の作品を制作することのよさを感じることができたと考える。

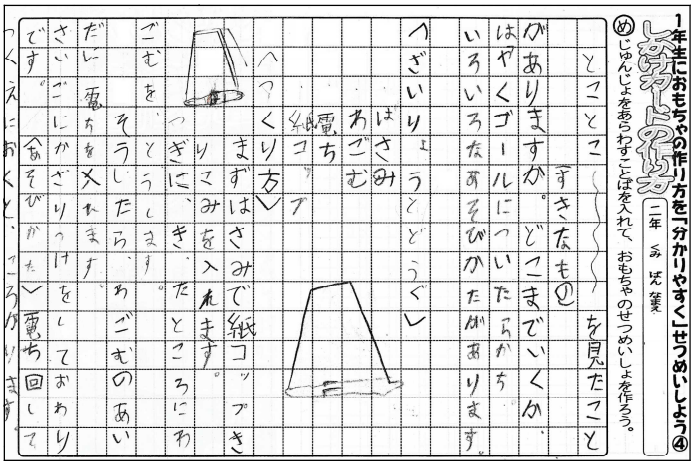


図７　抽出児Ａの説明書

抽出児Ｂは、見付けた表現の工夫の有用性について、自らの考えを発表することはなかったものの、友達の発表に熱心に耳を傾け、自分の全文シートやアイテムを何度も見比べていた。自分で説明書を書いた際には、「項目を赤で書いていいですか」と尋ねてきた（図８）。「その方が見付けやすいから」という発言からは、全体での共有を通して、表現の工夫の有用性に気付くことができ、進んで表現を工夫しようとす

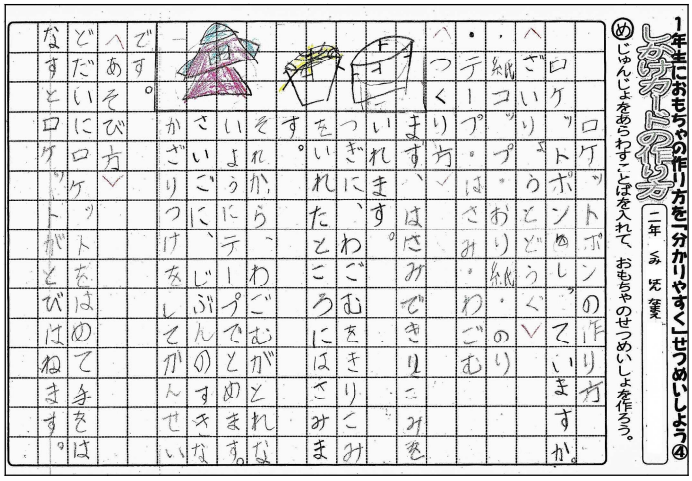


図８　抽出児Ｂの説明書

る意欲が感じられた。抽出児Ｂは表現の工夫の有用性を考える活動を行う中で、実感を伴って表現の工夫を使うことのよさを感じることができたと考える。

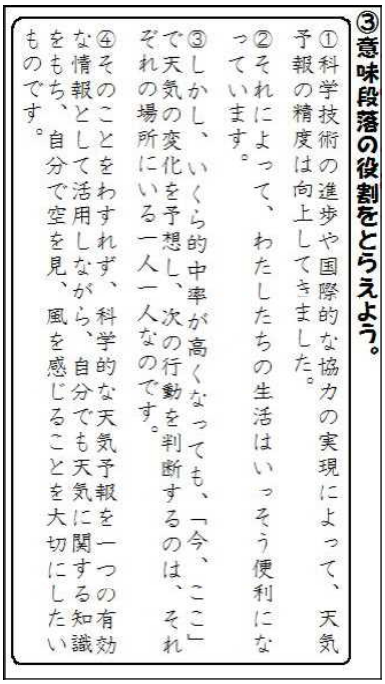


図９　アイテムとして活用した「まとめの段落」

２　単元名　「説得力のある文章の書き方を知ろう！」
　教材名　「天気を予想する」　第５学年

(1)　「表現の工夫」を捉える

①　活用した「比べるアイテム」と学習活動の概要

第５学年の実践「説得力のある文章の書き方を知ろう！」は、「まとめの段落」が文章全体の構造をそのままに、意味段落の要約文を順番どおりにつなげてまとめている。そのため、「まとめの段落」を「比べるアイテム」として、文章全体の読み取りに生かすこととした。

「まとめの段落」は図９のように、１文ずつに番号を振り、別紙として提示した。そして、どの文がどんな役割をしているか考え、鉛筆で囲みながら意味段落に分けた。その後、文章構成を明示した全文シートと「まとめの段落」を比べ、両方の文章構成が相似していることから、前半部分（天気予報について）は筆者の主張とは直接関係のない文章であることを捉えた（図10）。

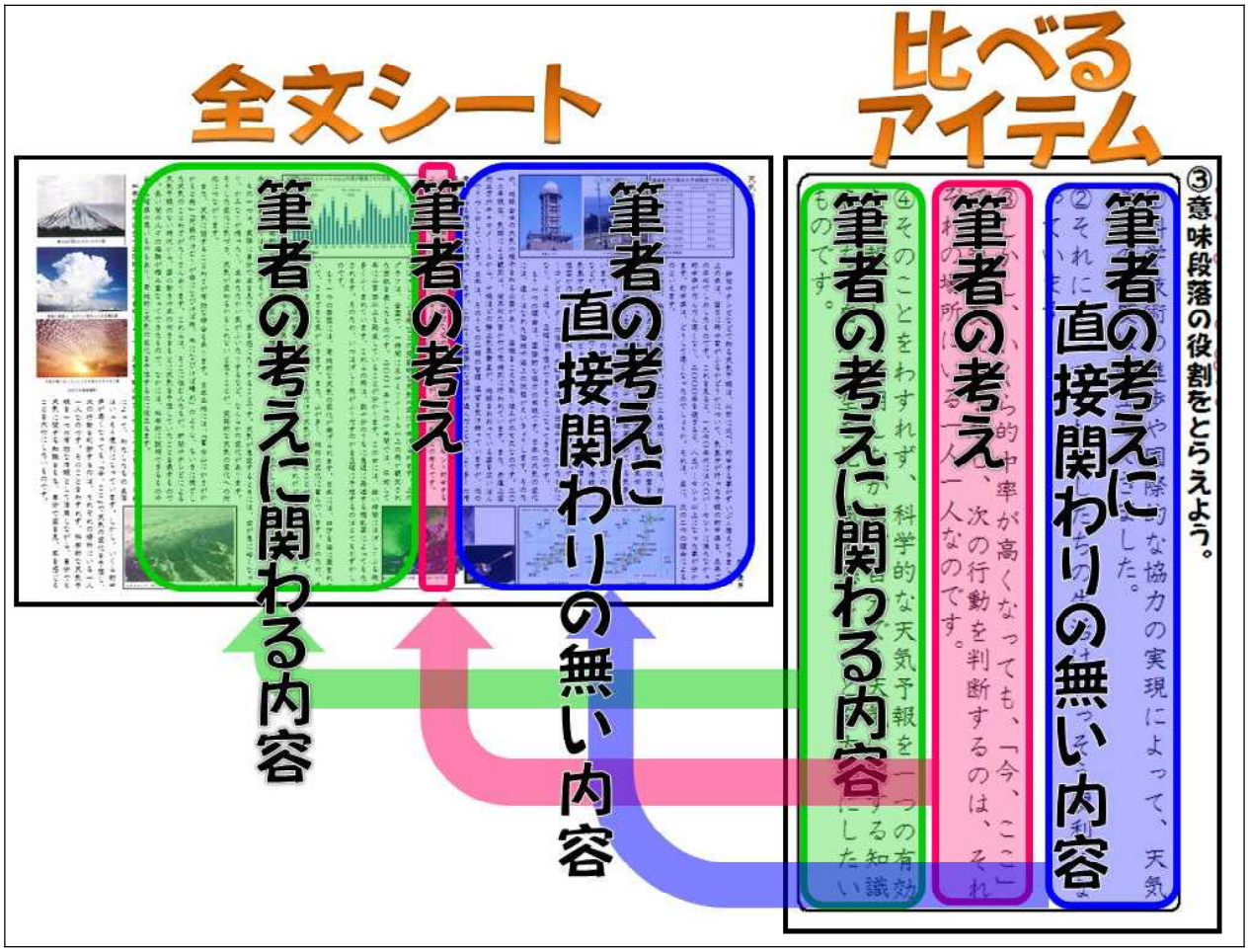


図10　文章構成に分けた全文シートとアイテムとの比較

②　全体の様子から

アイテムである「まとめの段落」の文章構成を捉える際には、まず「主張はどの文か」を決めることから始めた。一つの文を選ばせることで、全員が自分の考えを持つことができ、９割の児童が

３文目か４文目を選んでいた。アイテムと本文を比べた際には図11のようなやり取りが見られた。下線を施したやり取りからは、短い文章の読み取りは本文全体を見て読むときよりも児童にとって分かりやすい課題であったということが分かる。

また、波線を施した児童の発話からは、他者の意見を聞きながら考えを深めている様子がうかがえる。アイテムと本文を繰り返し読むうちに、本文の意味段落の読みを深めることができ、一見、教材のテーマであるかのような「天気予報」についての記述部分は、主張とは直接関わりのない文章であることに気付くことができた。

T：今日はまとめに着目してみます。読んでどんな感じがしますか？
C：全体が短くなっているみたいだ。
C：今まで読んだ所が要約されているよ。
T：まとめでもう一度同じことを繰り返しているね。そこで、まとめの構造を捉えれば、他の部分の意味も分かるかもしれない。まず、まとめを構成要素に表してみよう。
T：主張に関わる部分はどこですか？
C：まとめの４文のうち、３文目が筆者の主張で４文目が提案だと思うよ。
T：１、２文目は？
C：主張と反対のこと。関係ない所。
T：まとめと本文を比べて分かることは？
C：初めの文は天気予報のことを書いているから、まとめと本文は同じ並び方になっているよ。
C：じゃあ、天気予報のことは主張と関係ないのか。
C：本文の前半部分は、いらない部分なんだね。

図11　「比べるアイテム」活用の様子

③　抽出児童の様子

抽出児Ａは、３文目と４文目のどちらかが主張であるという意見に対して、文末表現から、「４文目は筆者の提案」「３文目が主張である」と発言した。その際、逆接の接続語「しかし」が入ることで強調されることや４文目の文頭に指示語が入っていることからも、３文目が主張で４文目が提案であり、１、２文は主張と反対の文であると発言した（図12）。また、本文と比べた際には、筆者の考えが文章の中央付近にあることや、始めに天気予報について語られていることからも、本文とまとめの構成が似ていると発表した。活動の様子から、抽出児Ａはアイテムの読み取りを本文の読み取りに生かし、表現の工夫を捉えることができたと考える。

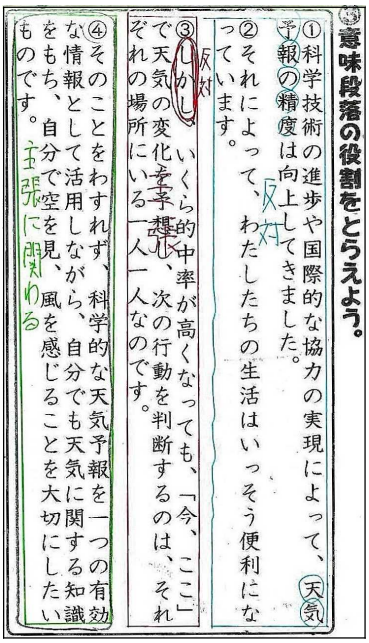


図12　抽出児Ａの読み取り

抽出児Ｂは、「４文目が主張である」と発言していたが、アイテムの読み取りを全体で共有し、本文と比べた際には「『しかし』と『では』は両方話題を変える接続語である。そのため、主張は本文と同じ接続語の後にある。」と発言し、本文と比べる過程の中で、様々な表現の工夫を捉えることにより「まとめ」と本文の文章構成の相似に気付くことができたと考える（図13）。また、全文シートと「まとめの段落」を構成要素ごとに同じ色を使って囲み、文章構成を比べたことは、本文と「まとめの段落」が同じ文章構成になっていると気付くのに効果的であったと考える。抽出児Ｂは、アイテムと本文を比べる活動を行うことで、表現の工夫に気付くことができたと考えられる。

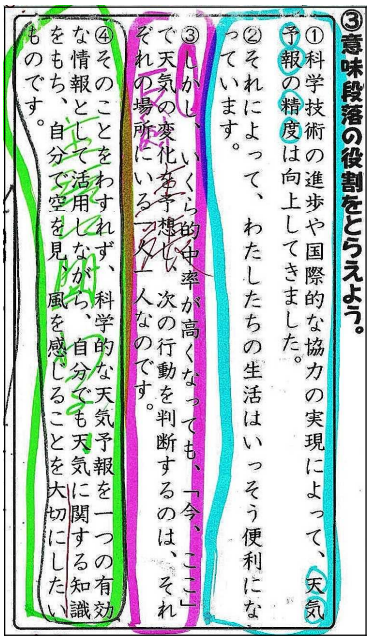


図13　抽出児Ｂの読み取り

以上のことから、短い文章の文章構造の読み取りは児童にとって把握しやすく、文章を要約した文や要約されている部分を「比べるアイテム」として活用することは、表現の工夫を読み取らせることに有効な手立てであると考える。

(2)　「表現の工夫」の必要性を考える

①　学習活動の概要

まず、筆者の主張に直接関わりのない部分（前半部分）を省いた文章を読ませ、前半部分があるときとないとき、受け取る側がどのように感じるのか、その違いを交流させた。その後、「筆者

はなぜ１～３段落を入れたのだろうか」と問うことで筆者の意図に迫らせた。このことを基にして、要旨をまとめるとともに、筆者の主張に対して自らの考えを持つ活動を行った。学習の終末には、筆者の主張に直接関わりのない部分を学習用語「譲歩」としてまとめ、次時の学習に活用できるようにした。

②　全体の様子から

「譲歩」のある文とない文を読み、受け取る側の印象の違いを比べた際には図14のようなやり取りが見られた。始めは「譲歩」のない文を「短くて良い」「なくても意味が分かる」とする意見を持つ児童もいたが、下線を施した発表をきっかけに、「『譲歩』の表現は必要なのではないか」と交流が進んでいった。そこで、「譲歩」の必要性を考えたところ、波線を施した意見が出されるようになり、全体で共有した。要旨をまとめると、結果は図15のとおりであった。また、主張を正しく読み取ることができた児童は、筆者の主張に対して自分の考えを持つことができ、自らの立場を明らかにして、意見文を書くこともできた。

このことから表現の工夫の必要性を捉えることが、筆者の主張との関連付けに有効であり、正しく説明的な文章を読み取るために効果的な手立てであることが分かった。

T：主張に関わらない部分を「譲歩」の表現と言います。前半部分の「譲歩」を抜いた文と抜いていない本文を読んでその感じ方の違いを比べてみましょう。
C：「譲歩」がなくても、筆者の主張は分かるし、変わらないよ。
C：「譲歩」がない方が短くていいな。
C：「譲歩」がないと、自分の言いたいことだけ言っている感じがする。
C：話題が唐突すぎてよく分からないよ。
T：①・②文はなくても分かる。では、本文１から３段落は、なぜあるのでしょう。
C：自分で考えなくても、天気予報があるじゃないかと反対意見を出す人がいるかもしれないから必要。
C：自分で天気を感じるすごさが分かるから、自分の考えが強調される。
C：天気予報の精度を上げるためにたくさんの科学技術を使っていても、やっぱり人間の力が必要だと主張したいから。

図14　表現の工夫の必要性を考える様子

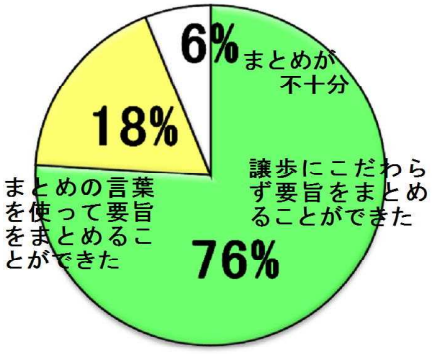


図15　要旨のまとめ方

③　抽出児童の様子

抽出児Ａは、「譲歩」を「主張の反対の部分」と捉え、まず、「譲歩」のない文から考え、図16左側の傍線部のような読みにくさがあると発表した。また、「譲歩」がある文を読んだ際には、右側の傍線部のように考え、「主張だけしかないと、自分勝手に意見を言っているだけのように聞こえるから」と発表した。さらに、点線部のように「疑問が出てくる」と主張した。抽出児Ａは、既習の説明的な文章の学習から問いの文の存在や多様な意見を検討することの必要性を考え「譲歩」の有用性に気付いていると考える。要旨をまとめる際には「譲歩」にとらわれることなく書き進めていたが、簡潔な表現にも興味を持ち、「『まとめの段落』を簡単にすることが要旨として適している。」と発言し、的確に要旨を捉え、まとめることができた（図17）。

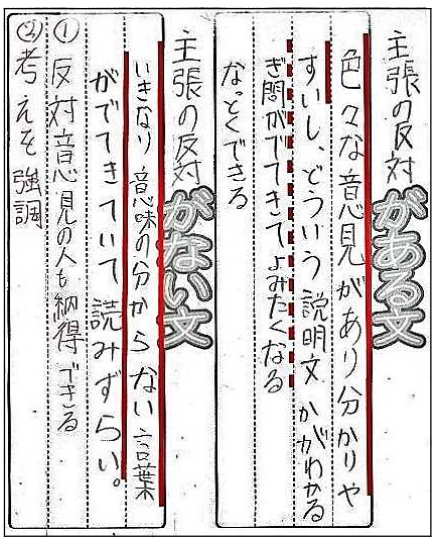


図16　抽出児Ａの記述

図17　抽出児Ａの要旨

以上のことから抽出児Ａは、様々な見方で表現の工夫を捉え、筆者の主張と関連付けて考えることができたことで内容だけにとらわれることなく要旨をまとめることができたと言える。

抽出児Ｂは「譲歩」がない文章について、図18左側の傍線部や点線部のような読みにくさを感じ、発表していた。右側にも同様に「主張とそれに付随する事例がある場合の効果（「譲歩」がない場合）」について書いていたが、傍線部や点線部のように、一方的に自分の意見のみを主張する文章は説得力がないと感じ「反対意見を含めて考えた上で自分の意見を持つ方が良い。」と発表した。

このことから抽出児Ｂは、「譲歩」がある文からはその意図を見付けることはできなかったものの、「譲歩」がない文章の読み取りを通して「譲歩」の有用性に気付くことができたと考える。

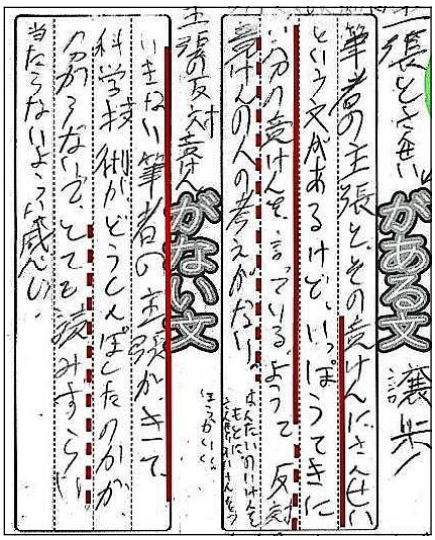


図18　抽出児Ｂの記述

また、抽出児Ｂは「まとめ」に書かれている言葉だけで要旨を書いていたが、「譲歩」の表現を学んだワークシートを振り返ると、自ら書き直し、自分の言葉でまとめることができた（図19）。このことから、抽出児Ｂは表現の工夫を筆者の主張と関連付けて考えることができ、内容だけにとらわれることなく要旨をまとめることができたと考えられる。

以上のことから、筆者の表現の工夫の有用性を考える活動は、説明的な文章を正しく読み取るために有効であることが分かった。

図19　抽出児Ｂの要旨の変容

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　「比べるアイテム」を活用したことにより、表現の工夫を捉えるための視点を明確にして読むことができた。児童は考える手立てとしてアイテムを活用し、課題を解決するために主体的に何度も読む活動を行うことができた。このことにより、説明的な文章を正しく読み取る力を育成することができたと考える。

○　表現の工夫を捉え、その必要性を考える活動を行ったことにより、興味深い内容だけにとらわれることなく、筆者の主張を正しく捉えることができた。このことにより、説明的な文章を正しく読み取る力を育成することができたと考える。

２　課題

効果的な「比べるアイテム」を提示するためには、内容や構成に合わせて「比べるアイテム」を選択する必要がある。そのため、一つの解決方法として、別紙資料として一般的な教科書教材に適すると考える「比べるアイテム」を提示する。

Ⅷ　提言

○　説明的な文章を正しく読むためには、表現の工夫の必要性を考える活動が効果的である。様々な構造の文章に触れる経験の少ない児童にとって、「どのように書かれているのか」という表現の工夫を捉えやすくするためには、比較対象となる資料を提示することが有効である。

○　説明的な文章を読み取る際には、「文章構造の特徴」を捉え、「表現の工夫」を読み取り、「表現の工夫の必要性」を考える過程を踏むことで、児童自らが何度も本文を読み返し、比較対象を用いて考えるという主体的な学びを保障することができる。

○　文章構成が単純な低学年から構造を読み取る経験を積むことは、様々な文章の書き方・読み方を身に付けるために有効である。説明的な文章を正しく読み取るためには、低学年から表現の工夫に着目する読み方を系統的に経験し、学年が上がるにつれ新たな文章構造や構成要素に出合い、知識や読み方を更新していくことが必要である。

＜参考文献＞

・青木　伸生　著　『青木伸生の国語授業　フレームリーディングで説明文の授業づくり』　明治図書（2017）
・「読み」の授業研究会　著　『国語力をつける説明文・論説文の「読み」の授業―読む力を確かに育てるあたらしい指導法入門―』　明治図書（2016）
・河野　順子　編著『質の高い対話で深い学びを引き出す　小学校国語科「批評読みとその交流」の授業づくり』　明治図書（2016）
・青木　伸生・青山　由紀・桂　聖・白石　範孝・仁瓶　弘行　著『筑波発　読みの系統指導で読む力を育てる』　東洋館出版（2016）

＜担当指導主事＞

尾形　一美　　坂本　直之